# KALS NEWSLETTER 63

2021年8月
九州アメリカ文学会
事務局　九州大学大学院言語文化研究院内
福岡市西区元岡 744
〒819-0395

## 宮崎へ「留学」

早瀬博範（宮崎国際大学）

“Good morning. How’re you doing?”—このような挨拶で１日が始まります。

佐賀大学を定年退職し、1 年間は特任教授として佐大にいましたが、今年の４月からは縁あって、宮崎国際大学で勤務することになりました。新しい土地でアメリカ文学や英語を教えながら、しばらくのんびりと気ままに生活するのもいいかもしれないと、軽い気持ちでした。しかし、そのような夢の生活は待っていませんでした。

宮崎国際大学は、なんと「外国人教員比率、全国第１位」（2021 朝日新聞出版大学ランキング）で、私の所属する国際教養学部は教員数 30 名ほどなのですが、日本人教員は私を含め３名しかいません。日本人教員は完全に少数派です。従って、教授会はもちろん、各種委員会も全て英語、当然、授業も全て英語です。これは、なかなかの「カルチャーショック」で、当初は、宮崎に来たはずなのに、アメリカに留学しているような錯覚に陥っていました。

授業は、教養の英語科目とアメリカ文学の担当ですが、英語科目は、教材はオリジナルなので、しかも１つの科目が週に２回組まれていますので、準備だけでも大変です。アメリカ文学の授業も、これまでの日本語での資料は作り直しで、しかも英語での授業で理解できるように、英語でのわかりやすい資料が必要で、こちらも準備に時間がかかります。

さらに授業以外の仕事もしっかりと仕事が準備されていました。4 月１日の赴任式ではいきなりの評議員で驚かされ、さらに５月からはカリキュラム改善強化が必要ということで、ワーキンググループ長として副学部長を命じられ、それに関連して他の仕事もやらされ、結局、これまでの生活とほとんど変わらないようなことになってしまい、当初描いた「のんびりと気ままな生活」は露と消えてしまっています。家族からは、刺激があっていいんじゃない、と言われていますが、年齢を考えると一理あるかもと自分を納得させています。

研究の方も、今は授業等で余裕がありませんが、残した仕事に少しずつ取り組みたいと思っています。退職に際し、九州アメリカ文学会以外は退会したのですが、むしろ退職して暇にしているだろうと仕事をもらい、なかなか縁が切れそうにありません。また江頭理江先生との共編『アメリカ文学から英語を学ぶ』第３弾を今年秋の出版予定で執筆中です。キャノンの作品に加え、オースターを入れたものになりますので、楽しみにしていてください。

宮崎は、南国のせいなのか、観光地だからかわかりませんが、人が優しく親切で、しかもおっとりとしていて、銀行、市役所、お店の対応もフレンドリーで、新参者にはとても住みやすい所です。さらにワイン好きには嬉しいことに、ワイナリーが４箇所もあり、試飲やおいしい食事ができるようです。現在はコロナ禍でほぼ封鎖の状態ですが、アフターコロナの楽しみとしています。

みなさま、このコロナ禍が終わり、宮崎に来られる機会がありましたら、必ずご一報ください。その頃にはしっかり案内できるようになっていると思いますので。

新型コロナの１日も早い終息を祈りつつ。

第 93 回　日本英文学会全国大会　シンポジウム報告

# Labor Diaspora/Labor Mobility

竹内勝徳（鹿児島大学）

本年 5 月に開催された日本英文学会全国大会にて「Labor Diaspora/Labor Mobility―アメリカ文学における移動と労働」というテーマでシンポジウムを行った。このテーマを選ぶきっかけとなったのは、ここ数年にわたって日系アメリカ人作家の作品を読んでいたこと、そして、それを COIL(Collaborative Online Internet Learning)、今で言うリアルタイム・オンライン授業で生かしてきたこと、この二つであった。話は米国カリフォルニア州から始まる。アメリカ西海岸、サンフランシスコ湾周辺のベイエリアは、グーグルやアップルなど IT 会社の本拠地が集まるいわゆるシリコンバレーとして、世界中のビジネス・パーソンや投資家の注目を浴びてきた。私が授業交流を続けるサンノゼ州立大学はその地域の拠点にある。10 年前からこの大学の日本語学科と私の演習のクラスを Zoom で結び、リアルタイムでアメリカ文化や日本文化についてディスカッションをしてきた。その中で日系アメリカ人作家の作品読解も行なったのである。

取組みを始めた頃はこの Zoom という先進的なソフトウェアが、コロナ禍にある日本のデフォルト・ツールになる日が来るとは夢にも思わなかった。10 年前の段階で米国には全国レベルで COIL の学会が既に設立されており、私とカウンターパートの先生はその学会で授業実践報告を行なったのである（私はビデオ出演だった）。Zoom や同系統のソフトである WebEX は米国においてこうした研究実績と実用化のプロセスを経ていたのである。この技術革新のプロセスがなかったら今の日本の遠隔教育は成立していなかっただろう。

では、Zoom と「Labor Diaspora/Labor Mobility」がどう関連するのか？サンフランシスコやシリコンバレーを訪れた人は容易に気付くことだが、世界中の投資マネーを引き寄せ、最新の IT 技術を教育に取り入れるこの地には、また、途方もない貧富の差が存在するのである。家賃は激しく上昇し、Uber の配車サービスによりタクシー業界は廃業に追い込まれ、賃金カットや解雇は突然降りかかる。住むところをなくした人々はホームレスになる一方、グーグルの社員は最低でも月額 30－40 万円の家賃を支払ってサンフランシスコに居住し、専用バスで社屋に通う。今ではドライバーによる運転操作を必要としない自動運転車の実験が重ねられほぼ実用レベルまで到達、これによって自動車業界の生産構造が激変すると言われている。多くの人々が失業し、全く新しい業態が出現するだろう。Zoom のような最新技術の開発が労働の流動性を促していることは間違いない。

そして、この地には歴史上、数多くの日系移民が流入してきた。日系アメリカ人作家の目を通して米国を眺めるとき、アメリカの産業が全世界の労働力の流れを利用して成長してきたこと、そして今、さらにその流れを加速しようとしていることがはっきりと理解できる。20 世紀においてアメリカ西海岸で花栽培を集約的に手掛けたのが日系アメリカ人であった。しかし、その生産拠点は今や中南米へと移行し、多くの日系アメリカ人の方々が異業種へと転換している。こうした国境を超えた労働力の可動性とグローバル企業やそれを後押しする国家の関係性を文学研究の視座で眺めることはできないか、この発想が「Labor Diaspora/Labor Mobility」へと結びついたのである。

調査をしてみると、同じような観点で移民系文学を研究している若い研究者が多いことに驚いた。Christopher Ian Foster の *Conscription of Migration: Neoliberal Globalization, Nationalism, and the Literature of New African Diaspora*、 Sonali Perera の *No Country: Working-Class Writing in the Age of Globalization* はその代表的な例である。しかし、彼ら／彼女らのスタンスに対して、私の興味はアメリカの白人男性作家、つまり、国境を越えた労働力の流動性を引き起こした側、アメリカの主流文化にカテゴライズされがちな作家たちが、上記の観点で読んだときに、移民系の作家に対してどのように共鳴できるかという部分にあった。

そこで、このシンポジウムではメルヴィル、トウェイン、スタインベックというキャノン作家、そして、日系アメリカ人作家カレン・テイ・ヤマシタを取り上げることとし、それぞれの専門家として江頭理江先生（福岡教育大学、トウェイン担当）、中垣恒太郎先生（専修大学、スタインベック担当）、牧野理英先生（日本大学、ヤマシタ担当）を講師としてお迎えした。この顔ぶれからすれば言うまでもないのだが、果たして、その内容は大変充実したものとなった。興味のある方は

proceedings で確認いただけると思う。私としては、現代のグローバリゼーション下における移民や移住労働者の問題、厳然として存在する社会問題が 19 世紀以降の文学作品によって照らし出されるという事実を再確認できたことが非常に大きな収穫であった。講師の先生方、また、当日、リモートで参加くださった皆さまには、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 2020 年度九州アメリカ文学賞　結果および講評

銅堂　恵美子（福岡大学）

**九州アメリカ文学賞**
該当者なし

**佳作**
該当者なし

（講評）
　本年度は 2 篇の応募がありました。2 篇の論文は意欲的な論文でしたが、審査の結果、残念ながら、どちらの論文も文学賞及び佳作の水準には至らないという結果となりました。応募して下さった二人には、心よりお礼申し上げます。審査委員からの詳細なコメントは各執筆者に送付しておりますので、ここで繰り返すことは避けたいと思いますが、審査委員会で指摘されたのは、先行研究を踏まえた上で論文の位置づけを行い、その独自性を提示することの重要性だったように思います。審査委員からのコメントが、二人の今後の研究の一助となることを願っています。過去 3 年間、2 篇の応募が続いておりますが、来年度はさらに多くの皆様からのチャレンジをお待ちしています。

## 地区だより

**〈沖縄地区〉**

加瀬保子（琉球大学）

沖縄地区委員の加瀬保子です。最近の沖縄地区での活動をご報告いたします。
琉球大学は 2021 年度前期に University of Wisconsin--Eau Claire より David Jones 氏をフルブライト客員教授として迎えました。COVID-19 の影響により昨年の来日が今年まで延期され、今年も 5 月末までビザが発給されず、来沖が実現したのは学期半ばの 6 月という難しいスタートでした。それでもアメリカ文学・文化研究（Critical race studies, American social movements, McDonaldization and Fordism）に関する 3 科目を担当し、学生に大いに刺激を与えてくださいました。それ以外にも教員向けセミナーとして、トランプ政権下のアメリカ、BLM に関する現在のアメリカの状況について、当事者としての問題意識を共有してくださいました。また、全学教員向けに、妻で Eau Claire 市の評議員を務める Catherine Emmanuelle 氏（市の評議員会議中の授乳禁止に反対する運動で全米的に話題になった方）をオンラインで繋いだ女性活躍推進のセミナーまで行ってくださり、わずか２ヶ月の滞在期間中に、本学の教育研究やダイバーシティ推進に非常に有意義な貢献をしてくださいました。

最近の会員個人の活動報告は以下の通りです。喜納育江先生は今年 5 月で 2018 年から 3 年間務めてきた *American Quarterly* の managing editor の任期を終えられました。その後 ASLE-Japan/文学・環境学会の副代表に就任され、現在は今秋開催予定の ISLE-EA（東アジア環境文学国際シンポジウム）の準備にご尽力なさっておられます。
私、加瀬は 1 月にコロナ禍のため ZOOM での開催となりました Modern Language Association の年次大会で 2 回発表いたしました。一つは“Life Writing for Antiaging?: Bio-imperialism and Antiaging in

*The People in the Trees*”で、ノーベル生理学・医学賞を受賞した Daniel Carleton Gajdusek をモデルにした Hanya Yanagihara の小説を植民地主義と抗加齢医学に焦点を当て分析致しました。もう一つは Northeast Modern Language Association 主催のセッションに招待していただき、“Neuroscience and Trauma Studies in the Humanities” というタイトルで発表をいたしました。多くの研究者と意見交換ができ、大変有意義でした。

コロナ禍の下、様々な制限がございますが、沖縄地区では引き続き其々が出来うる限り研究活動を行なって参ります。

〈鹿児島地区〉

千代田夏夫（鹿児島大学）

鹿児島地区からお便り申し上げます。森孝晴先生（鹿児島国際大学）からは今期もご活躍をお便りいただきました。以下に御了承を得て転載させていただきます。

・・・・・

新型コロナ感染症のため昨年の開催が中止となった日本ジャック・ロンドン協会の第 28 回大会は、6 月 12 日（土）に中・四国アメリカ文学会第 49 回大会との共催で開催されました。感染予防のためオンラインでの開催でしたが、シンポジアム「21 世紀から読み直すアメリカ自然主義文学」に、ノリスとクレインがご専門の中・四国学会の二人の先生方とともに、私と教え子で中国の大学の学科長をしている劉鵬氏が参加し、我々二人はそれぞれロンドンについて発表しました。なお、本年 9 月に行われる九州アメリカ文学会の 9 月例会で私はロンドンについての発表の司会をする予定になっています。本年 3 月には、ロンドンの知人で彼に影響を与えた薩摩藩士長沢鼎に関する論文「長沢鼎のロマンスをめぐって」が『鹿児島国際大学ミュージアム　調査研究報告』第 18 集に掲載され、論文「ジャック・ロンドンと下関」が『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第 21 巻第 4 号に掲載されました。また、本年 6 月に発行された『ジャック・ロンドン研究』第 8 号には、劉氏の論文や平田ひかる氏（台湾の台北科技大学講師、私の教え子）の論文と並んで、ロンドンの日露戦争従軍記「王族の道、泥の海」が私と戸川聖也氏の共訳で掲載されました。なお、9 月にはまた、新しい長沢関連の論文とロンドン従軍記の共訳が上記学部論集に掲載される予定です。

・・・・・

以上、ジャック・ロンドン研究の中心地たる鹿児島の熱気を世界に向けて発信しておられる森先生からのご報告でした。

生田和也先生（鹿児島女子短期大学）は 5 月に開催された第 39 回日本ナサニエル・ホーソーン協会の全国大会にてワークショップ「『ロジャー・マルヴィンの埋葬』を再読する」にご登壇、Zoom や Mentimeter などのウェブツールを用いた発表を実施され、大好評を得られました。

千代田は竹内理矢・山本洋平編著『深まりゆくアメリカ文学　源流と展開』（ミネルヴァ書房、2021）中「愛」の一項を担当、また松本昇監修、深瀬有希子・常山菜穂子・中垣恒太郎編著『ハーレム・ルネサンス　〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』（明石書店、2021）に「クィア・ハーレム・ゴシック―ウォレス・サーマンとネラ・ラーセンにおける性」を寄稿させていただきました。ご高覧賜れましたら幸いです。また 5 月の大会シンポジウム「イーディス・ウォートン再読―生誕 160 年を控えて」ではご清聴を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

〈熊本地区〉

楠元 実子（熊本高専）

池田志郎先生から地区委員を引き継ぎました楠元です。よろしくお願い申し上げます。

故田中啓介先生と故中島最吉先生を世話人として 1989 年に発足した熊本アメリカ文学研究会は、2－3 か月に 1 回の頻度で活動しております。（現在は池田先生と尚絅大学の田口誠一先生が世話人）

１年余り開催できない状況が続いておりましたが、今年度 Zoom で再開しました。2 回の会を終えたところで、そのご報告をさせていただきます。ビデオをオンにして、オンラインで顔を合わせながらの和やかな会となりました。

○第 152 回（2021 年４月２４日）Zoom/熊本大学にて
題　目： Christina Baker Kline 作 *Orphan Train* で知るアメリカ史
発表者/司会者： 池田 志郎（熊本大学）
＊最初に作品最後の部分を使って、1920、30 年代にアメリカ東部から西へと走っていた「孤児列車」の歴史の解説をされました。異なる時代を生きる 2 人の女性の関係性、つらい状況の受け入れ方を中心に論じられました。人間の強さ、心の動き、細部の描写の意味についてなど、史実に基づいた作品について活発なディスカッションがされました。

○第153回（2021年７月２４日）Zoom/熊本大学にて
題　目： 自伝的短編をつなぐ Lucia Berlin の沈黙
発表者： 濵田 比呂美（熊本大学非常勤）
司会者： 原口 昌子
＊*A Manual for Cleaning Women* についての詳細なご発表でした。まず作品内の沈黙の諸相を概観し、その後、認知心理学との関わりや作者の人生との関連性について論じられました。作品のユニークさに加え、アルコール依存やフェミニズム、多様性など今日的な要素についての質問やコメントがなされました。

なお、次回（9/18 予定）は Sandra Cisneros の *Have You Seen Marie?* についての発表が予定されています。ご関心がある方は、メールにて楠元（kusumoto@kumamoto-nct.ac.jp）までご連絡ください。

**〈北九州地区〉**

**齊藤 園子（北九州市立大学）**

北九州地区の活動をご報告いたします。
北九州アメリカ文学研究会が活動を再開されました。研究会の薬師寺元子先生から次のようなご報告を賜りました。

１．第 15 回研究発表会（2021 年 3 月 6 日）　北九州市立小倉南生涯学習センターにて
　発表１：　村橋素行氏「ヘンリー・ジェイムズ “The Jolly Corner”を再定義する」
　発表２：　長岡節子氏「『他者化のメカニズム』とは何か」
２．第 16 回研究発表会（2021 年 8 月 21 日予定）　北九州市立小倉南生涯学習センター
　発表１：　藤丸昌枝氏「『イワンの馬鹿』――賢者と愚者――心豊かに生きる為に必要なものとは」
　発表２：　吉川美津子氏「歪められた記憶――スティーブンスの虚実とその生き方」（カズオ・イシグロ『日の名残り』）
３．第 9 回特別講演会（2021 年 11 月 13 日予定）
　講師：　九州アメリカ文学会長　高橋勤先生（九州大学）

その他、会員の研究成果ですが、前屋敷太郎先生（九州共立大学）がマーク・トウェインの研究書（単著）*A Moralist Gone Wild: Tracing Mark Twain's Non-conformism from Huck Finn to Young Satan*（BlueSky Publishing, 2020 年）を上梓されました。トウェインの思想には一貫性がないとする一般的な見解に疑問を投げかけ、トウェインの抵抗主義の姿勢が生涯を通じて貫徹していることを論証するご著書です。ウェイン・アーノルド先生（北九州市立大学）は、ご論考 “An

Interview with Honda Yasunori”（*NEXUS: The International Henry Miller Journal*, vol. 13, 2020 年）、“Four Japanese in Search of Henry Miller”（*European Journal of American Studies*, vol. 16, no. 1, 2021 年）をはじめ、数多くの場で研究成果をご発表されています。アーノルド先生のご研究は、ヘンリー・ミラーの日本人との交流に焦点をあて、ミラーと日本との個人的な関係を探るものです。また齊藤が、ヘンリー・ジェイムズ関係で日本英文学会第 93 回全国大会において研究発表をさせていただくとともに、トリエステ大学出版局からの国際共著 *The Sound of James: The Aural Dimension in Henry James's Work*（EUT Edizioni Università di Trieste, 2021 年）に論考を掲載いただきました。合わせて、ミュージカル版『レ・ミゼラブル』に関わる論考「＜革命＞の影響と変容――ミュージカル『レ・ミゼラブル』の文化的アイデンティティに関わる一考察」が日本アメリカ演劇学会の学会誌『アメリカ演劇』（第 32 号，2021 年）に掲載されました。ご高覧賜りますと幸いに存じます。

## 事務局からのお知らせ

永川とも子（九州大学）

(1) 9 月例会について
2021 年 9 月例会は 9 月 4 日（土）13:00～17:00 の予定となっております。プログラム等の詳細につきましては KALS ホームページをご覧ください。

(2) 日本英文学会九州支部大会アメリカ文学部門シンポジウムについて
昨年度延期していたアメリカ文学部門のシンポジウムが、2021 年 10 月 16・17 日開催の第 74 回大会（西南学院大学にて開催予定）において行われます。内容（予定）は以下の通りです。

招待発表　大園弘　（九州国際大学教授）

シンポジウム企画名：
都市と連帯－文学的ニューヨークの探究

司会・講師　藤野功一（西南学院大学）：アンダーソン *Loneliness*（1919）/カウリー *Exile's Return*（1934）
講師　永尾悟　（熊本大学）：ボールドウィン *Go Tell It on the Mountain*（1953）
講師　舌津智之（立教大学）：カポーティ *Breakfast at Tiffany's*（1958）
講師　岡本太助（大阪大学）：エイズ禍とニューヨーク演劇界（1980 年代）

(3) アメリカ文学会全国大会について
2021 年 10 月 2 日（土）と 3 日（日）に関西学院大学で開催予定であった第６０回全国大会が、新型コロナウィルスの全国的感染拡大と変異株による事態の深刻化が懸念されることから、Zoom 等使用のオンライン開催に変更となりました（5 月 18 日決定事項）。詳細は本部ウェブサイトをご覧ください。

## 編集後記

各地で大雨による甚大な被害が出ています。被害にあわれた方々に、心よりお見舞いを申し上げます。コロナの感染爆発と異常気象の中、アメリカ小説を読みながら、Hero の出現を待ちわびています。

ニューズレター担当　　江頭理江（福岡教育大学）